機関紙は闘う武器

職場、地域から続々と投書

ここ数年来労働運動は急速な発展をしてきた。だが政府や資本家階級の攻撃もますます活発となり、とくにPR活動は激しく、多くの労働者はその攻撃にさらされています。こうした敵の思想的な攻撃のまえに、私たちは、ますますかたく手を結んでいく必要が痛感されています。そのために機関紙活動は一日としておろそかにできませんが、機関紙は組合員がつくっていくものです。そういうあらわれか、さいきん職場から地域から投稿がぞくぞく寄せられています。本号ではこれを契機に、ここにその特集をこころみました。

スト中止について

緑ガ丘若葉　渡邊　務

長期化を予想された炭労の春季闘争も事実上の解決をした。予想に反し通算二十何日でおつけなくあまりにもあつけなく妥結しスト中止になつた。六百円のベースアップと、共闘態勢をとつた三鉱連の企業闘争も、中闘のやむを得ないという大巾な譲歩によつて、大勢は決したのである。極端にいうなら炭労、いや三鉱連の敗け戦で何ともしがたい憤りを覚えるのである。

われわれはスト突入前、種々の情宣で事の認識を再三再四いやという程、たたきこまれ、その気持で完全白紙撤回を目標に進んで来た。だが、結果としてのこの状態を、どう判断し理解し納得すればよいのかまつたく途方にくれる。

再建案提示直後だつた。具体項目の中の会社貯金の金利引下げについて「これだけは組合の方から逆に提案したいぐらいだろう…」といつて笑い合つたことがあつたしかし、組合の方針として、事実そうでもしたいところだが提案箇条の一つでも入れることはそれだけの後退で、すべてに関連影響してくる……ということで、これを非としてまで闘争態勢を固めてきたのが事実であつた。その後、三井の六千名首切りが出され、あくまで賃・企闘は同時解決という炭労の意志統一もでき、再び力を得てわれわれが闘争態勢を固めたのはつい先日だつたのである。幾多の細部交渉が今後に残されているとはいえ、基本的な人員問題を放棄したような現状の中で、何の山元団交かといいたくもなる。

妥結理由は一体どんなところにあるのだろうか。それに対する組合員の共通した意見として、六百円アップの中労委あつせん案が出された後の内部態勢があげられるつまり中闘が今後に自信を失つたという見方である。

「三井は別個にして、カンパすればいい」という意見があることを耳で聞いてもいる。

しかし三鉱連として、そういう共闘を当初からあてにしていた筈ではないのである。不況の名による各資本の攻勢に対して、前しよう戦的な、三井資本の前に防波堤として試練の先がけともなつて、その荒波をうけて立つ心構えは十分できていたのである。

七日の朝刊に、原委員長談話として「当初からの方針である企業整備問題と賃上げの同時解決という目的を達することができた。今度の闘争を慎重に反省し、今後さらに労働条件向上、一方的な企整阻止戦をすすめる覚悟だ」があつた。

なる程、同時解決はできた。決していつわりはない。しかし、それは六百円アップの中労委あつせん案受諾時に、内容の如何を問わずスト中止時期を程よく合しただけの事ではなかつたのか。今後に残された山元交渉も、根を掘上げられた末稍的な交渉にすぎないとすれば、一体どれだけの価があるというのだろうか。三鉱連は一時つけ、中闘自体の大義名分も生かされ、結果は時間的に同時解決という点が見出されたのである。

また、会社案を骨ぬきにしたという言葉は、若干名の首切りを、希望退職、鉱業学校その他の線でくいとめたということであろうが三鉱連の基本的な白紙撤回の線からみれば正反対の立場であり、骨ぬきという感にもつかない優越感は三鉱連の残された山元団交などあつて無きにひとしい感じの、自らの露出とみてさしつかえあるまい。

私は思う。遠藤さんの人事問題が中央で取扱われなかつたことを大きなよろこびだと。理由は簡単である。そうであつたら、いま遠藤さんは首を切られている。

当然の結果として、山元団交は高圧的な会社の態度で一貫すると思う。どんな進展をするか予測はできないが、三鉱連は以上の三の舞いを演じてはならない。遠藤さんの問題にしても、遠藤さん個人の問題ではなく、会社の不そんな態度を許すことは労組の必要性を皆無にすることである。炭労が三鉱連、三鉱連が三鉱、三鉱が三川支部一本になつても貫ぬかねばならないことはいうまでもない。

炭労と袖をわかつてでも闘うという意欲が欲しかつた。

再建案を骨抜きにしただけでも大きな収穫だとの声もあるが、いかにも外見的に会社は六千名の首切りを撤回したという大幅な譲歩をみせている。しかしこれは背信なのである。

まず六千名の首切り案が出たのは情勢判断のうえ、いつでも撤回するということも計算してあつたはずである。予定どおり、それは数日後に撤回され、大々的な譲歩としてのPR効果をあげ、ここに至つては炭労、中闘の譲歩も当然のこととしての思いを一般にうえつけ、中闘自体の大義名分も生かされ、結果は時間的に同時解決という点が見出されたのである。

また、会社案を骨ぬきにしたという言葉は、若干名の首切りを、希望退職、鉱業学校その他の線でくいとめたということであろうが三鉱連の基本的な白紙撤回の線からみれば正反対の立場であり、骨ぬきという感にもつかない優越感は三鉱連の残された山元団交などあつて無きにひとしい感じの、自らの露出とみてさしつかえあるまい。

私は思う。遠藤さんの人事問題が中央で取扱われなかつたことを大きなよろこびだと。理由は簡単である。そうであつたら、いま遠藤さんは首を切られている。

当然の結果として、山元団交は高圧的な会社の態度で一貫すると思う。どんな進展をするか予測はできないが、三鉱連は以上の三の舞いを演じてはならない。遠藤さんの問題にしても、遠藤さん個人の問題ではなく、会社の不そんな態度を許すことは労組の必要性を皆無にすることである。炭労が三鉱連、三鉱連が三鉱、三鉱が三川支部一本になつても貫ぬかねばならないことはいうまでもない。

こんどの闘いに そなえよう

宮浦　島　宏　康

三月二十三日いらいの炭労全山無期限ストは十四日目に解決しました。

卒直のところ、私はこのスト中止を不可解な気持でうけ取つたし自分だけかと思つて友達とも会つて意見を聞いてもみました。

面白い話だが、端的に表現すれば、私と同じように「どうもわからん」という人たちが多く、「はやく終つてほつとした」という人たちも何人かいました。また、中には「中央はよくやつた、企業内問題の限界がこのようになつたと思う」という人もいました。

このようにいろいろとりどりに受けとられている中で、中央も山元でもそれぞれの機関で正式見解を発表するとは思うが、私なりの意見を申上げてみたい。

三池では現末手当闘争以前から〝合理化反対闘争〟が中心に論議され、組合員のほとんどがこの問題への関心が異常に高まつていました。この異常な関心の影に賃上げ闘争が押しやられ、企反闘争から賃上げ闘争への発展が関連づけられないままになつていたきらいがあつたようです。しかしそれにもかかわらず組合員の〝はまり〟は、実に堂々たるもので自信にあふれていました。

再建案が提示されるとすぐさま荒尾・大牟田の中学校長会は〝中卒者を失業させる〟再建案反対〟と三井鉱山へ抗議しているし、二月の決起大会には〝失業を増大させる再建案反対〟と、大牟田の全労働者が憤激して集まり、共闘の拡大によつて全市民的な抗議へ発展しました。

翼職法反対闘争でいまだかつてなかつた一大統一行動が組まれ、この威力は法案を一時後退させました。それによつて正面からの攻撃を止めさせられた資本家は春闘が全体的にもりあがらないうちに中労委を通じて、適当なところで闘争を押さえようとしてきました。地方、参院選挙においては、憲法違反までもやつて〝皇太子ご成婚ブーム〟で乗り切り、その裏で政治の中心問題である安保条約の改訂を一挙におこない、日本をアメリカ帝国主義の目下として、公然たる軍事体制にくみ入れようとしております。

これと呼応して、炭鉱独占、とくに三井は、恐慌を労働者の犠牲でのり切るために、企業合理化を前面にかかげ、われわれに正面から攻撃をかけてきました。また攻撃と対決して闘つたのですが、〝賃上げと三井の企業整理は同時解決〟という炭労の方針に正面から攻撃をかけ闘争を分裂させ孤立させようと出てきました。

〝皇太子ブーム〟で全体の関心を日本の現状からそらそうとするマス・コミの宣伝のなかで私たちは会社の中心的なネライである〝合理化を進める〟再建案のなかに労働者を企業内意識へひきずり込むベールである不況、赤字の概念をおりこませ実質的には、首切りをすすめ、福利厚生をおさえ、職制の権威を確立する道をひらき、わずかの賃上げで頭をなでるという攻撃と対決して闘つたのですが、結論をいえば、今回のスト中止はこれは単なるスト中止であつて、問題の解決は今後に残されて、こんどのわれわれの態度いかんにかかつているといわざるを得ないと思います。

職場では残業を抑制し、くり込みを規制しだしてきたことが、もうすでに問題になつているといわれています。

遠藤分会長の処分撤回についても断固闘わねばなりません。

われわれはここで変な理屈ばかりをいつている場合ではないと思います。これからさき、具体的に起つてくる問題を逐一はね返えしあらたな要求を闘いとるようにしなければなりません。

全組合員の断固たる態度と、闘争拡大への不断の努力が重ねられることを期待します。

一九五九年四月十日

編集部から

御意見ありがとうございました渡辺さんの御意見は、こんどの闘争にたいする意見のひとつとして、代表的なものでかなり一面的な見方だと思います。

十二日にひらかれた中央委員会で中闘の報告を中心に三時間余にわたつて討議された内容が、そのまま渡辺さんの意見にたいする答えになると思います。

その内容は委員を通じて報告されるでしようが、次号〝みいけ〟でもその討議内容を要約して掲載しますので参照して下さい。

× ×

話題の中から

宮浦　うえむら

炭労の企闘、賃闘のストは、去る六日中止されました。最終的な結論はいまだ判然としませんが、整備案のおよそ三分の一は、今後の山元交渉に残されているようです。スト中止後の現場でも入替問題、職制の問題、賃金の問題等、いろいろ話題はつきません。その中で、定期昇給制度もときに話題になります。近ごろ賃金の長期安定という言葉がよく出てきますがそれは

「好況、不況にかかわらず賃金が順次に上つてゆき、これに加えて好況の際はその生産性向上にともなつて利益が配分される」

ことだそうです。

中山あつせん案の前文にもあるように、賃金は好、不況に左右されないもので、賃金は不況のしわよせをされるべきでない。と、いつてありますが、あいまいな赤字を発表して一方的に首切りを通告して来るような現在の経営者が労働者に不況のしわよせはしないと考えてくれるでしようか。果して不況時に定昇の完全実施が考えられるでしようか。

また定昇によつて、賃金の配分権を経営者にわたすことによつて企業意識の高揚、労働者同志の反目等、種々の問題もおこります。

やはり労資の利益が相反している現在の社会では、われわれの賃金はわれわれの団結力で闘いとる以外に方法はありません。

今後出炭制限の強化等で、われわれに対しての資本攻勢もますます激化してくることは必至です。われわれはさらに組織の再点検をおこない、今後の山元交渉に備えるとともに、当面の問題である平和闘争にも力を遺憾なく発揮しなくてはなりません。

× ×

遠藤さんをねらつて いろ敵の陰謀

本所　吉田義勝

三井、三菱、住友などの独占資本家たちは、政治や経済の権力をにぎつており、賃金闘争や企業整備反対闘争、安保条約粉砕などの闘いの背後には、国家権力がつねにうごめいていることを忘れてはならない。

過去の歴史を顧みても、労働者を抑圧するための法律が、つぎからつぎへと制定されていつた。

戦後アメリカの占領政策として強行された「レッドパージ」はもちろんのこと、公労法の改悪による官公労にたいする争議権のはく奪、「破防法」や「スト規制法」などの一連の組合分裂と弾圧をねらつた法制定がなされた。

三池においても、忘れることのできない「英雄なき一二三日」の闘いに、権力介入の事件があつた彼らの挑発行為によるデッチあげが、山の上事件あるいは勝立事件としてあらわれた。

二十八年十月、首切り撤回の闘いのさなかに山本、森田、古賀、松原（以上宮浦）池田（三川）の五氏は起訴され多くの執行猶予も検事の訊問をうけた。そして取調べは「拘留しないでおこなう」のが通例なのに彼らはこの原則を破つて「拘留」したり家族や友人たちに面会できる憲法上の自由をふみにじつて「面接」を禁じたり久留米、柳川、瀬高、大牟田と分散留置したり、明らかに検察庁の態度と行為には政治的含みがあつたとしてあらわれた。

二年二カ月後の昭和三十年十二月になり、福岡地裁で宮浦支部の山本、森田、古賀、松原の四氏は六カ月から二年六カ月の懲役と、執行猶予三年の刑がいい渡され、池田氏は無罪（検事控訴中）の判決があり、目下福岡高裁に控訴中である。

勝立売店事件も山ノ上事件の一カ月後に勝立売店で発生した事件である。職制のM氏が組合役員の改選時に、組合員にたいし立候補者某氏に投票することを強制したこの状態を知つた組合員と家族はM氏に問題の追及をした。警察はこのことを暴力行為として十七名を逮捕し、浦本、平島、えび原砥上の四氏に対して四カ月から六カ月の懲役と執行猶予二年の判決がなされ、組合はこれを不当であるとして現在高裁に提訴中である

このように権力の介入がありながらもこの一二三日の闘いでわれわれは結集された力で闘えば、資本家の野望を粉砕することができることを知つた。

しかし、会社はつねに組合の分裂と弱体化をねらい、企業意識の育成に努力している。今回提案された企業再建案がそのあらわれであり、なおその上に三川支部遠藤氏の解雇通告による組合弾圧をたくらんできた。

遠藤分会長の行動は、職場の総意による職場活動であり、職場民主化の闘いである。正常な組合活動としてなされた行動であるが、会社は、遠藤氏個人を槍玉に上げることで、組合運動に介入し制限しようとしている。

このようなときに、われわれは山ノ上事件や勝立事件のもつ意義を深く認識し、その裏にかくれた資本家と権力者の策謀を見極わめ、遠藤分会長への不当解雇を撤回させる闘いを組むことが大切であるしかも、そのことは山ノ上、勝立事件の仲間たちを守ることでもある。真理はわれわれのものであり未来は労働者のものである。

× ×

メーデーの準備をしよう

三川池田昭二

さわやかな五月の緑のざわめきに、全世界労働者の日、メーデーがやつてきました。

この日、地球上のあらゆるところで、社会主義諸国で、資本主義諸国で、植民地諸国で、労働者と農民を中心にした働く人々の集会とデモが組織されます。

この日は、いろいろの考えのちがい、人種のちがい、風習のちがいをのりこえて、いつもはなかなかやりとげることのできない万国の労働者の統一がやりとげられるのです。

搾取をうけている労働者は、国際的にも団結してこそ資本家の抑圧をはねのけることができるのです。

むかし、フランスの造船労働者は賃上げのためストに入りましたフランスの資本家は船の修理を、ストをしていないイギリスの造船所にたのみました。ここで労働者は国際的にも団結することの必要を知つたのです。

しかし、私には今年のメーデーの準備は低調になりはしないかと心配しています。

いわく「地方選挙がたいせつでメーデーどころか」

「賃上げもうまくいかないのにメーデーどころか」

労働者の祭りどころか」

みなさん、もう一度メーデーの歴史をふりかえつてみようではありませんか……。

私たちは、いま炭鉱の合理化問題に直面しています。

炭鉱に機械が導入されればされるほど、われわれが生産を向上させればさせるほど、会社はわれわれに首切り、賃下げ、労働強化を要求してくるのです。

私たちは一カ月にわたつて闘いました。そして、会社の合理化を完全にはねかえすことはできませんでした。

私たちは炭労の統一、いや全労働者の統一をこんどほど身に泌みて感じたことはありません。

昨年の翼職法改悪のとき、岸首相を先頭に資本家とアメリカの激励にもかかわらず、労働者の五百万の統一はたつた一日の決起で、これを撃退しました。

この教訓は、日本の労働者――大企業に働こうと中小企業に働こうと――の統一を勝ちとることが何よりも必要なことを教えています。

とくに、いま民族の運命を決するといわれる「日米安保条約改訂」に労働者階級が無関心であつてはならず、日米安保条約破棄のため、日本の労働者の統一、団結が要求されるのです。

五月一日は全日本はもちろん全世界の労働者の団結の日なのです

この日を成功させ、さらに、この団結を発展させるために奮闘することは、とくにいま必要ではないでしようか。

そのために、いまからメーデーの準備を職場で、居住区ではじめましよう。

平和、自由、独立、生活向上のために。

× ×